

赤ちゃんという暴君に振り回されないための、
男女平等参画の実現・育児休暇の取れる労働施策・ネウボラという仕組み

今崎 牧夫

乳幼児期の安定した愛着の提供と個人の心理発達過程は、精神分析学において最も大きなテーマであり、その集積は膨大な知の結晶と言えないだろうか。そこから 2000 年代に急速に進んだ乳児の観察研究は、より生物学的な視点を導入し「心の成長」の謎を明らかにしつつある。一方、医学モデルから出発していることで誤解が多いが、現在の精神分析は人と人との関りを理論化しようと試み続けている。

これらの実践や研究成果が明らかにしてきたことは高橋睦子先生の今日の講義でサラッとお話に上がった、安定的な愛着関係を提供されることは、その後の成長を健全なものとし、愛着を提供できる成人が育つ可能性が高いということだ。負の反対を正とするならば、「正の世代間連鎖」を国家単位で作りに続けてきたフィンランドのお話は負の連鎖と関わることの多い自分にとって、とても刺激的で壮大な社会実験を教えてもらったように思えた。

正しいか正しくないか、こうすればこうなる、レッテルを貼りながら分類する目で人を見る、と言ったことを全て排除していった残った純粋なエッセンスが「関りの作法」なのだと教えて頂いた。

ネウボラもオープンダイアログも、ラヒホイタヤも通底するのは「関りの作法」であるとの言葉には医学モデルや分類や分析を主とする人間観が蔓延する社会において、大きな変革を意味する言葉であろう。

ネウボラでは出産前の関りが最も多いと知り、とても理にかなっていると感じた。

良き助言者との対話を繰り返すことにより、安定した愛着関係を保つ母親になるための伝達が行われ、それを個別性のある自分のものとして語ることで自分の子育てのイメージが作られるのではないだろうか。

生物学的な臨界期とも想定されている 1 歳 6 か月の間、現実の子育ては赤ちゃんという暴君に振り回され、束の間の睡眠を取りながら多くの事をやり遂げなければならない。その偉業を男女平等参画の実現と、育児休暇の取れる労働施策やネウボラという仕組みにより支えることは、社会の宝としての赤ちゃんを大切にすると同時に、その社会にどんな人間が居て欲しいかといった理念を表しているのだと教えられた。

知らないことが多く、知識の提供という意味合いも強かったが、それだけではない人に対する姿勢が伝わってきた講義でした。お忙しいところありがとうございました。